詩の原理

萩原朔太郎

詩の原理

萩原朔太郎著

小學館刊

昭和二十一年十一月一日初版發行
昭和二十二年十一月十日再版發行

詩の原理

定價 六十五圓

著作權者 萩原明子

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 相賀徹夫

印刷所 東京都文京區飯田町五六 株式會社常磐印刷所

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 株式會社 小學館
電話九段(33)一一二五番(代)
會員番號A一一九〇二七

配給元 東京都千代田區神田淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

詩の原理

目次

詩の原理

序……五
新版の序……一〇
讀者のために……一五

概論

詩とは何ぞや……一七

内容論

第一章　主觀と客觀……二五
第二章　音樂と美術……三三
第三章　浪漫主義と現實主義……四〇

第四章　抽象觀念と具象觀念……五〇
第五章　生活のための藝術・藝術のための藝術……六一
第六章　表現と觀照……七五
第七章　觀照に於ける主觀と客觀……七九
第八章　感情の意味と知性の意味……八五
第九章　詩の本質……九三
第十章　人生に於ける詩の概觀……一〇五
第十一章　藝術に於ける詩の概觀……一一三
第十二章　特殊なる日本の文學……一二五
第十三章　詩人と藝術家……一三七
第十四章　詩と小說……一四八
第十五章　詩と民衆……一六〇

第一章　韻文と散文……一六九
第二章　詩と非詩との識域……一八〇
第三章　描寫と情象……一九〇
第四章　敍事詩と抒情詩……一九六
第五章　象徴……二〇六
第六章　形式主義と自由主義……二一九
第七章　情緒と權力感情……二二五
第八章　浪漫派から高踏派へ……二三二
第九章　象徴派から最近詩派へ……二四〇
第十章　詩に於ける主觀派と客觀派……二四八
第十一章　詩に於ける逆説精神……二五八
第十二章　日本詩歌の特色……二七二
第十三章　日本詩壇の現狀……二八五

結論

島國日本か？　世界日本か？……三〇九
『詩の原理』の出版に際して……三二六

坂幀　恩地孝四郎

詩の原理

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

序

本書を書き出してから、自分は寢食を忘れて兼行し、三箇月にして脫稿した。しかしこの思想をまとめる爲には、それよりもずつと永い間、殆んど約十年間を要した。健腦な讀者の中には、ずつと昔、自分と室生犀星等が結束した詩の雜誌『感情』の豫告に於て、本書の近刊廣告が出てゐたことを知つてゐるだらう。實にその頃からして、自分はこの本を書き出したのだ。しかも中途にして思考が蹉跌し、前に進むことができなくなつた。なぜならそこには、どうしても認識の解明し得ない、困難の岩が出て來たから。

いかに永い間、自分はこの思想を持てあまし、荷物の重壓に苦しんでゐたことだらう。考へれば考へる程、書けば書くほど、後から後からと厄介の問題が起つてきた。折角一つの岩を切りぬいても、すぐまた次に、別の新しい岩が出て來て、思考の前進を障害した。すくなくとも過去に於て、自分は二千枚近くの原稿を書き、そして皆中途に棄ててしまつた。言ひやうのな

い憂鬱が、しばしば絶望のどん底から感じられた。しかも狂犬のやうに執念深く、自分はこの問題に齧じりついてた。あらゆる瘠我慢の非力をふるつて、最後にまで考へぬかうと決心した。そして結局、この書の内容の一部分を、鎌倉の一年間で書き終つた。それは「自由詩の原理」と題する部分的の詩論であつたが、或る事情から出版が厭やになつて、そのまま手許に殘しておいた。

大森に移つてきてから、再度全體の整理を始めた。そして最近、終にこの大部の書物を書き終つた。これには「自由詩の原理」を包括したり、そのずつと前に書いて破いた「詩の認識について」も、概要だけを取り入れておいた。そして要するに、詩の形式と内容とに渡るところの、詩論全體を一貫して統一した。即ちこの書物によつて、自分は初めて十年來の重荷をおろし、漸く呼吸がつけたわけだ。何といふ重苦しい、困難な荷物であつたらう。自分はちかつて決心した。もはや再度かうした思索の迷路の中へ、自分を立ち入らせまいと言ふことを。

自分はこの書物の價値について、自ら全く知つてゐない。意外にこの書は、つまらないものであるか知れない。或はまた、意外に面白いものであるか知れない。さうした讀者の批判は別として、自分は少なくともこの書物で、過去に發表した斷片的の多くの詩論——雜誌その他の

刊行物に載る――を、殆ど完全に統一した。それらの詩論は、たいてい自分の思想の一部を、體系から切斷して示したもので、多くは暗示的であつたり、結論が無かつたりしたため、しばしば讀者から反問されたり、意外の誤解を招いたりした。（特に自由詩論に關するものは、多くの人から誤解された。）自分はこれ等の人に對し、一々答解することの煩を避けた。なぜなら本書の出版が、一切を完全に果たすことを信じたからだ。この書物に於てのみ、讀者は完全に著者を知り、過去の詩論が隱しておいた一つの「鍵」が、實に何であつたかを氣附くであらう。

日本に於ては、實に永い時日の間、詩が文壇から迫害されてゐた。それは恐らく、我が國に於ける切支丹の迫害史が、類なきものであつたやうに、全く外國に珍らしい歴史であつた。單に詩壇が、詩壇として輕蔑されてゐるのではない。何よりも本質的なる、詩的精神そのものが冒瀆され、一切の意味で「詩」といふ言葉が、不潔に唾かけられてゐるのである。我々は單に、空想、情熱、主觀等の語を言ふだけでも、その詩的の故に嘲笑され、文壇的人非人として擯斥

された。

かうした事態の下に於て、いかに詩人が壓屈され、卑怯なおどおどした人物にまで、ねぢけて成長せねばならないだらうか。丁度あの切支丹等が、彼等のマリア觀音を壁に隱して、祕密に信仰をつづけたやうに、我々の虐げられた詩人たちも、同じくその藝術を守るために、祕密な信仰をつづけねばならなかつた。そして詩的精神は隱蔽され、感情は押しつぶされ、詩は全く健全な發育を見ることができなかつた。「かうした暗憺たる事態の下に」自分は幾度か懷疑した。「詩は正に亡びつつあるのでないか？」と。それほど一般の現狀が、ひどく絶望的なものに見えた。

けれども今や、詩を求めようとする思潮の浪が、新しい文學から起つてきた。すべての新興文學の精神は、すくなくとも本質に於ける詩を叫んでゐる。おそらくは彼等によつて、文壇の風見が變るだらう。實に自分は長い間、日本の文壇を仇敵視し、それの憎惡によつて一貫して來た。あらゆる詩人的な文學者は——小說家でも思想家でも——日本に於ては不遇であつた。のみならず彼等の多くは、自殺や狂氣にさへ導かれた。

だが既に時期は來てゐる。何よりも民衆が、文學に於ける詩を求めてゐる。彼等は文壇を見

捨ててしまつた。そしてより詩的精神のある彼等の文學――卽ち大衆文學――の方に走つて行つた。我々の進歩した民衆は、もはや文壇に於ける藝術的な、そしてあまりに藝術的であることによつて、精神の詩を持たないやうな文學書類を、一切讀まうとしないだらう。あらゆるすべての事情が、今や失はれた詩を回復し、文學の葬られた靈魂を呼び起さうとしてゐるのだ。」正義は復活されるであらう。

この新世紀の朝に際して、自分がこの書物を出版するのは、遇然にも意義の深いことと言はねばならぬ。自分はこの書物に於て、詩に關する根本の問題を解明した。卽ち詩的精神とは何であるか、文學のどこに詩が所在するか。詩の表現に於ける根本の原理は何であるか、詩と他の文學との關係はどうであるか、そもそも詩と言はれる概念の本質は何であるか、等々について、思考の究極する第一原理を論述した。故に標題の示す如く、正に「詩の原理」であるけれども、普通に刊行されてる詩書の如く、單に韻律音譜の註であつたり、名詩の解說的批判であつたり、初學者の入門的手引であつたり、或は獨斷的詩論の主張であつたりするものとは、全

然内容が異つてゐる。この書の考へてゐる事は、詩の部門的思考でなくして、文學、藝術及び人生の全般に於ける詩の地位が、正しくどこにあるかを判別するところにある。故にこの書物の論ずる範圍は、單に韻文學としての詩に限らず、本質に於て詩といふ言語が包括し得る、すべての文藝一般に及んでゐる。（實に或る意味からみて、本書は一種の小說論でさへある。）

思ふに「詩」といふ言語ほど、從來廣く一般的に使用されて、しかもその實體の不可解であり、意味の摑へどころなく漠然としたものはないであらう。本書はこの曖昧をはつきりさせ、詩の詩たる正體を判然明白に解說した。（自分の知つてゐる限りかうした書物は外國にも無いやうだ。）そこで自分の讀者は、すくなくともこの書物から、詩といふ觀念が意味するところの、眞の根本の定義を知り得るだらう。そしてこれが解れば、文學の最も重大な精神が解つたのである。故に自分の望むところは、單に詩の作家ばかりでなく、いやしくも詩的精神の何物たるかを知らうとしてゐる、すべての文學者及び藝術家の全部に向つて、この書物を讀んでもらひたいのである。諸君が若しこの書を一讀すれば、すくなくとも翌日からして、詩の批判を正當にすることができるであらう。

昭和三年二月

大森馬込町にて

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo